平成29・30年度　港区教育委員会研究奨励校

研　究　紀　要

研究主題

新学習指導要領を踏まえた言語活動の充実
～ 深い学びのための授業改善 ～

平成31年1月31日（木）

港 区 立 高 陵 中 学 校

あいさつ

港区教育委員会　教育長　青　木　康　平

現在、我が国は、人生100年時代を迎えようとしており、また、超スマート社会（Society 5.0）の到来に向けて、IoTやビッグデータ、人工知能（AI）の活用などの技術革新が急速に進んでいます。こうした変化が激しく、多様な情報を読み合うことが必要な時代に生きる我々には、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性や創造性を豊かに働かせ、未来を創っていく力が求められています。また、全ての子どもたちが、豊かな人生を生き抜くために必要な力を身に付け、活用するようにする上で、教育の果たす役割は大きいと言えます。平成29年3月告示の中学校学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進、カリキュラム・マネジメントの確立といった、新しい時代に求められる資質・能力を培うための取組について示されました。また、各学校においては、生徒の発達の段階を考慮し、言語活動、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとすることが謳われています。

こうしたなか、港区立高陵中学校では、平成29・30年度と2年にわたり、「新学習指導要領を踏まえた言語活動の充実～深い学びのための授業改善～」を研究主題とし、生徒に必要な力を付けるために、深い学びを創出する授業改善の方法について、全教科・領域の授業を通して研究、実践を積み重ねてこられました。本校では、教員が身に付けるべき指導技術を、「高陵ティーチングスキル」「高陵コミュニケーションスキル」としてまとめ、この2つのスキルを全教員が活用し、言語活動を充実させ、生徒の深い学びを実現する授業を展開することにつなげてこられました。また、校長のカリキュラム・マネジメントのもと、横断授業研修、授業を見合う期間を設定するなど、教員の資質向上に向けた取組にも力を入れることで、教員一人ひとりが授業改善に向けての意識を高めてこられました。その結果、生徒が学習内に「話し合い活動」に主体的に参加する場面が見えたことは研究の大きな成果であります。そして、日常的に、生徒が自分の考えや気持ちを伝え合う活動が行われるようになったことは、大変意義深いものであると考えています。

各学校や地域におかれましても、本校の研究成果を十分に活用していただき、教育活動全体を通して、「言語活動の充実」に力を入れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導について、一層積極的な取組をお願いします。

結びに、研究を推進されました平川　恒美校長をはじめ、教職員の指導に敬意を表するとともに、研究に際し御指導・御支援いただきました講師の先生方、ならびに温かいご支援、ご協力を賜りました保護者・地域の皆様に深く感謝申し上げます。

はじめに

港区立高陵中学校　校長　平　川　恒　美

東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」での本校生徒はここ3年間の結果で、国分倍入（最も正答率が高い部位）が国内を超える教科が複数ある等、高い学力分布の傾向があり、さらに社会の変化への対応が迫られる現状を捉えると、生徒に自ら考えて対応できる力を高めるために、学びの質を高める必要があります。

このような中、新学習指導要領が示す、予測困難な時代に一人ひとりが未来の担い手となる生徒の育成を目指し、必要な力を付けるための深い学びをいかに授業で創出できるか、内容の構成や授業改善の方法を資質に発信・授業できるよう研究を行ってまいりました。本校の研究は、先人の教育技術を踏まえ、校内の言語活動を充実させるための共有事項として、主に授業で活用する「高陵ティーチングスキル」、教科等横断的な学習場面で活用する「高陵コミュニケーションスキル」を作成し、目的的な指導を積み重ねた授業です。全教員で新学習指導要領を読み、各教科の見方・考え方についての理解を深め、指導事項をどのように学習させるかを、様々な形式の実践授業を通して検証してまいりました。改めて皆様からご意見をいただき、今後、協議や改善を重ね、より質の高い授業の展開を皆様と共に目指したく存じます。

2年間にわたる本校研究に、親身で的確な指導・助言を賜りました明治学院大学心理学部教育発達学科教授　中村敦雄先生をはじめ、継続的にご指導いただきました玉川大学教育リサーチセンター客員教授　吉田和夫先生、また様々な機会にご助言いただきました多くの皆様により感謝申し上げます。港区教育委員会の全面的な支援を賜り、貴重な機会をいただけましたことに厚く御礼申し上げます。

Ⅰ　研究主題

新学習指導要領を踏まえた言語活動の充実　～ 深い学びのための授業改善 ～

Ⅱ　主題設定の理由

新学習指導要領で示された深い学びをどのように生徒たちと共に作り上げていくのか、という課題に応えるため、まずは教員自身が授業改善に取り組むべく、上記の主題を設定した。教員自身がこれからの時代に必要な教育技術を、先人たちの積み上げてきた教育技術を踏まえ、検討し、当たり前のものとして身に付けていくことを課題として共有した。さらに、本校の生徒たちは高い学力を有している一方で、正解することばかりを意識して、自分の意見を伝えたり、質問をしたりすることでより深い学びを得ることに消極的な姿勢が見られることも課題となっていた。このことから各教科の見方・考え方を踏まえ、生徒が学び方や考え方を身に付け、思考を深めさせることにより、深い学びを実現するための言語活動の充実について検討し、教員が共有するスキルをもとに授業改善に取り組んだ。

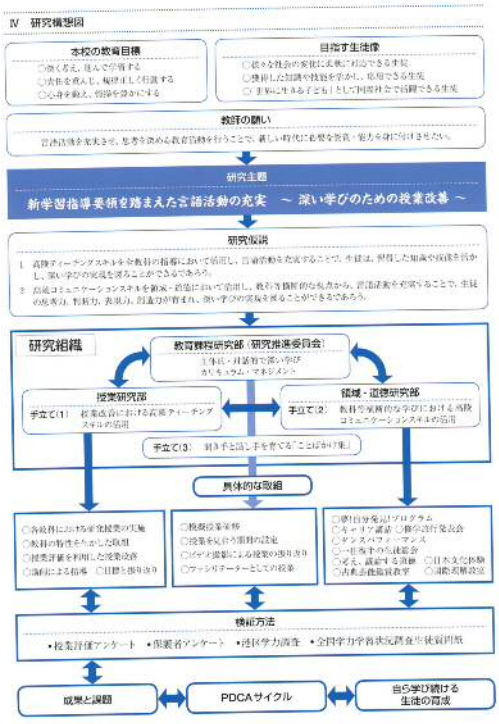
Ⅲ　研究仮説

言語活動を充実させ、深い学びの実現に向けた指導スキルを全校体制で共有することが重要であると考えた。また、一つの教科の授業だけではなく、教科等横断的な視点に立ち、領域や運営において指導スキルを活用し、3年間を見通した系統的な指導を行うことで深い学びの実現が図ることができると考え、以下の研究仮説を設定した。

1　高陵ティーチングスキルを全教科の指導において活用し、言語活動を充実することで、生徒は指導した知識や技能を活かし、深い学びの実現を図ることができるであろう。

2　高陵コミュニケーションスキルを領域・運営において活用し、教科等横断的な視点から言語活動を充実することで、生徒の思考力、判断力、表現力、創造力が育まれ、深い学びの実現を図ることができるであろう。

Ⅳ　研究構想図



Ⅴ　研究主題にせまるための手立て

1　高機能ティーチングスキル（各教科での指導内容の共有化）

No.	項　目	内　容
1	目標の明示	(1) 授業時などで本時の目標と授業の流れを明示し、見通しをもたせる。 (2) 生徒に評価規準を示し、意識をもたせる。
2	明確で簡的な指示	(1) 一度にたくさんの指示を出さない。 (2) 何もしていない生徒をつくらない。（空白の時間をつくらない）
3	話し合い活動の基本	▶自分の考えをもって話し合いに参加させる (1) 個 → 集団 → 個（みんなで考えた解答が自分でできる。） (2) 個人の見方の時間を確保する。 ▶話し合いに全員を参加させる (1) グループは3、4人の人数で構成し、話し合いに全員を参加させる。 (2) 相談・発表に生徒全員に担当の機会を確保する。
4	一往復半の言語活動	(1) 生徒が自分の考えを伝える機会を設定する。 （聴き合い、自分の考えに活用させたこと） (2) 生徒の活動に対して適切に賞賛・反応させる。 (3) 話し手と聞き手のやりとりの場を意識的に設ける。
5	フィードバックの活用	(1) 指導の過程で評価規準に対する達成度を確認する。 (2) 生徒のやる気や行動を高く評価する。 (3) 相互評価を取り入れる。（ワークシート等）

2　高機コミュニケーションスキル（総合的な学習の時間、特別活動での指導内容の共有化）

No.	項　目	内　容
1	聴覚障害の観点を明示	(1) 目当て、相手意識、友達の状況の条件を事前に決定し評価する。 (2) 発表はメモで話すのを基本とし、原稿は最小にする。
2	見通しをもって活動する力の育成	(1) 対話・インタビューに相手の話を引き出す。 (2) 我の発表は第三者視点で行動の振返をなくす。 (3) 写真撮影などと記録を公開する。
3	主体的に考える力の育成	(1) 発表前に評価表記入させる。 (2) 評価表記入後に他の感想を述べさせる。 (3) 聴く側を評価し、ほめる。
4	話し合い指導の共有化	話し合いの目的と手段を示す。 ▶思考を広げる話し合い ▶思考を深める話し合い
5	生徒の相互評価の設定	(1) 発表前に相互評価の観点を決めておく。 (2) 友だちに必要な表現方法（表情・動作）を知らせる。 (3) 相互評価を取り入れた授業の工夫に取り組む。

3　聞き手と話し手を育てる「ことばかけ集」

No.	ことばかけ	具 体 例
1	言い換え	「今、○○さんが言ったことを、あなたのことばで言えますか？」
2	意見	「○○さんの考えについて、どう受けとめましたか？」 「授業を『反対』と『それにどうして』」
3	質問	「自分自身で聞いてみたいことがある人はいますか？」 「違った視点から何かありませんか？」
4	説明	「どうしてそう思ったのですか？」 「どうやってその答えにたどりついたのかな？」 「もっと、詳しく説明してほしいな。」
5	反対意見	「これは、どんな時でも成り立つことなのかな？」 「これに当てはまらない例はないのかな？」

Ⅵ　実践事例の紹介

1　主体的・対話的で深い学び　カリキュラム・マネジメント

（1）模擬授業研修

中学校では、教科指導の方法を若手教員がベテラン教員に質問したり、ベテラン教員が若手教員から新しい発見や学びを得たりすることで、よりよい方法が共有財産として受け継がれてきた。しかし、お互いの教科の専門性によりアドバイスすることを控えてしまったり、本校のような小規模校では各教科に教員が一人しかいないため、教員同士が交流して、教科の指導内容や指導方法を深めることができなかったりする。このような課題を解決し、研究主題に迫るために年間3回の模擬授業研修を行った。スキルを活用する実際の指導場面に近い環境で授業を行い、生徒にどのような効果が期待されるのかについて検証した。各学年から1人の代表者を出し、3人の教員が高機能学校で作成したスキルの活用を目的に、他の教員を生徒に見立て、実施した。

［模擬授業研修の流れ］

①代表の教員が5分間で模擬授業を行う。他の教員は生徒役として授業に参加する。（中学年から一人ずつ選出し、模擬授業研修を3回行った。）

②授業終了後に、感想を教師用に書き出し、グループごとに意見交換を行う。感想を評価する際には、「高機能ティーチングスキル」を共通のものとして話し合いを行った。

③グループごとの代表が話し合いの内容を発表し、模擬授業を決定した。授業者にフィードバックする。

［模擬授業研修を終えて（教員の声）］

最初、他の教科での言語活動については意見交換する機会がなかなかなかなかなかった。授業内での先生方の様子や評価内容など、自身の教科指導に活かせるものが数多くあった。

［模擬授業研修で扱った内容］

数学	平均値
道徳	いじめをなくす言葉づかい
数学	図形トリック
国語	行間を読む
技術	使える材料を考えよう
理科	授業を始めるにあたって

（2）授業を見合う期間の設定・ビデオ撮影による授業の振り返り

授業改善のために、お互いの授業を見合う期間を6月に2週間設定した。各教員は授業の空いている時間に、別の教員の授業を参観する。また参観の際には「高機ティーチングスキル」がどのように活用されているか、またそれが生徒の学びにどのようにつながっているか等、推薦者がチェックシートをもとに分析し、授業者にフィードバックされた内容や、自分の授業に取り入れたい点について意見交換をした。それぞれの教知の得意なことや、力を入れている分野を見考することができたため、ワークシートの活用やICT機器の活用に関する課題を、教師集団で共有しやすくなった。

授業撮影の機会を活用して、一時間の授業を撮影し、自分の授業を客観的に振り返る機会をもうけた。教師自身が気付きにくい癖を見つけたり、説明がわかりにくかったりすることに気が付くことができた。

2　授業改善における高機能ティーチングスキルの活用

国語科　深い読みを実現するための工夫

目標の明示　明確な指示　話し合いの基本　一往復半の言語活動　フィードバック

ティーチングスキルを活用した言語活動の工夫

「文学的文章を『深く』読む」ために以下の言語活動を取り入れた。

一往復半の言語活動　登場人物の相互関係や心情変化を俯瞰を通に捉えさせるために、主人公の生き方を図書館で活用しているようなPOPのように20字程度でまとめさせる。

各自が考えたPOPの内容について、次の発表者が質疑し、応答させることを繰り返させた。最後前に、その班で新しいPOPを作らせる活動を通して、深い読み取りを行った。

話し合いの基本　詩や短歌、俳句などの韻文の一部を伏せて、そこに入る語句を、ものの見方や考え方を広げるための話し合いを通して考えさせた。

学びの成果と課題

【成果】文学的文章に限らず、様々な単元において言語活動を工夫することで生徒の読み取り方に、単元のはじめと単元末において他者の意見を自分に取り入れ、意見を発展させる点で大きな変容を見ることができた。

【課題】言語活動を扱う教科として様々な活動が考えられるが、同じような活動が多くなってしまった。3年間で、どの単元でどの言語活動を行うかを考え、深い学びの実現に向けた教師、特別活動年間指導計画を作成する必要がある。

社会科　話し合いの価値を見える化して、考えの深まりを実感できるワークシートの工夫

目標の明示　明確な指示　話し合いの基本　一往復半の言語活動　フィードバック

ティーチングスキルを活用した言語活動の工夫

一往復半の言語活動　ワークシートを活用し、ただの情報交換に終わらないためのワークシートの作成

ワークシートの構成

①発問及び指示

自分の意見A　話し合った人の意見をメモする（色ペンで書く）

②意見交換をして考えたことや気付いたことを書く。

自分の意見B

意見Aと意見Bを比較し、思考の広がり、深まりを見とっていく。

学びの成果と課題

【成果】意見交換からどのような学びがあったのかをワークシートに明記させることで、生徒の思考の広がりや深まりを見ることができた。生徒自身も自分の思考の広がりを実感することができ、話し合い活動の意義を理解し、より主体的に話し合いに参加するようになった。

【課題】ワークシートに書く時間を設定することで、他の生徒からヒントを得たり、意見を客観視したりすることができても、討論や話し合いの場合では、情報交換に終わってしまった場面があった。ワークシートで培った見方・考え方を討論等にも活かしたい。

数学科　「答えを考える」から「考え方を考える」授業へ転換する工夫

目標の明示　明確な指示　話し合いの基本　一往復半の言語活動　フィードバック

ティーチングスキルを活用した言語活動の工夫

個　個人で考え（個人思考の時間の確保）

集団
①ペア・グループで意見交換　話し合いの基本
（自分の意見を伝える）
②ペア・グループごとに発表
（表現力の育成）
→ICT機器を効果的に用いる。
③質疑応答　一往復半の言語活動
④各ペアの発表の評価・考察
（生徒が評価し、教員が考察する）

個　ワークシートに記入
（学んだことを自分で考え、整理する）

学びの成果と課題

【成果】11月に実施した授業アンケートにおいて、「わからない問題を他者と一緒に考えたり、教えあったりすることができた。」と回答した生徒は1年生前のアンケート結果に比べ増加していた。また、全体の前で考えを伝える機会を確保したことにより、表現力が向上したと考えられる。

【課題】言語活動を工夫して行うことができたが、言語活動によって「数学の力」が付いたかどうかが疑問点である。今後は、言語活動を取り入れつつ、演習量も増やしていきたい。

理　科　話し合い活動を通じて、表現力の育成を図る工夫

目標の明示　明確な指示　話し合いの基本　一往復半の言語活動　フィードバック

ティーチングスキルを活用した言語活動の工夫

①全人で実験結果の考察をする
（そう考えた理由を示すことを徹底する）
②グループ内で自分の意見を発表し合い、話し合いながら、ひとつの考えにまとめる
③各グループごとに発表　話し合いの基本
表現力の育成
（ホワイトボードを使い、図や文章を用いて人が理解しやすい発表を工夫する）
④各グループに対する評価　フィードバック
「授業の一番大切なこと」を可視化
（目標への達成度について、生徒と教師の双方の視点から意見を出し合う）
⑤ワークシートに考えの深まりを記入
科学的な考えの再構築　フィードバック

学びの成果と課題

【成果】自分の言葉を使って意見を正確に伝えることや、相手が理解しやすいように文章や図などを用いて発表することを繰り返すことにより、生徒の表現力の育成につながったと考えられる。

その結果、授業アンケートでは、「学んだことを活用して自分の考えを表せた」と回答した生徒の割合に上昇傾向がみられた。

【課題】主体的に活動するという観点において、グループ内での個人の活動に偏が見受けられたため、グループ内での役割を明確にし、全生徒が活動する機会を増やす必要がある。

英語科

英語を積極的に使って、互いの考えや気持ちを伝え合う指導の工夫

目標の明示 | 明確な指示 | 話し合いの基本 | 一往復半の言語活動 | フィードバック

ティーチングスキルを活用した言語活動の工夫

目標の明示　毎授業時に授業の流れ、本時の流れを板書、提示した。

明確な指示　授業時の各ステップごとに、そのやり方、評価方法などを説明、指示した。

フィードバック　教員が"To do List"や"Check List"を使って目標と評価を明確にし、生徒の活動を対話・ペアワークなどで互いにシェアさせる活動を行う。

活動例：
- 基本文スキット（復習練習→ペア練習→テスト→オリジナルスキットの発表）
- シナリオリーディング（ナレーション作成→発表→相互評価）
- リーディングタスク（部分翻訳、通訳、ジェスチャーリーディングなど）
- ディスカッション（ペア、グループでの意見交換）

学びの成果と課題

【成果】目標の明示と明確な指示により生徒の学習状況が把握でき、活動の内容を各学年の発達段階や、生徒の実態に応じた設定とすることができた。学期ごとに"To Do List"や"Check List"を用いて、目標を明示し、適切な課題にチャレンジさせることで、生徒たちは意欲的、積極的に課題に取り組み、英語での活動を積極的に行えている。

【課題】活動に参加しているが主体的な活動ができていない生徒に対する個に応じた指導法を確立したい。

音楽科

対話を大切にした実技指導における工夫

目標の明示 | 明確な指示 | 話し合いの基本 | 一往復半の言語活動 | フィードバック

ティーチングスキルを活用した言語活動の工夫

明確な指示　一往復半の言語活動　実技の授業においては、個人が考え、練習する時間を必要とするため、個人の技能の得手不得手によって習得時間に差が出る。そこで「苦手＝嫌い＝活動しない」状況が生まれる。そこで、明確な指示を出し、グループで一往復半の言語活動を活用し、課題解決に取り組む時間を確保した。話し合い活動を通して、全員の演奏による達成感を味わい、自信に繋げることで他の活動においても積極性をもてるようになると考える。

またヒントとなる音楽用語を提示することで誰でも抵抗なく話し合えるように工夫した。

学びの成果と課題

【成果】授業アンケートより「学んだことを活用して自分の考えを表せた」「考えを交流する一往復半の学習活動ができた」において肯定的意見が上回っており、主体的に考え、自ら学ぶ力や他者の考えを自分に生かす力が身に付いてきたと考える。

【課題】合唱コンクールに向けた歌唱指導以外の単元において、生徒にとっての目的の把握が不十分であり、その把握を生徒にどう捉えさせるかが今後必要であると考える。

保健体育科

話し合い活動を通じて、表現力の育成を図る工夫

目標の明示 | 明確な指示 | 話し合いの基本 | 一往復半の言語活動 | フィードバック

ティーチングスキルを活用した言語活動の工夫

話し合いの基本　一往復半の言語活動　体育の授業では、個人及び社会生活における課題について自主的に考えた内容を班員と共有し、相互に評価し合うことで、協働的な環境づくりを実践的に行うよう設定した。

思春期における友人や異性関係と自分を取り巻く社会、さらにはコミュニケーションの手段（言語的・非言語的）を基本の情報として設定した。

グループごとの課題を承継し、課題ごとにグループで話し合った。話し合い活動では①原始、②自分の考え　③メンバーの考え　④自分が考えた伝え方の工夫　⑤メンバーが考えた伝え方の工夫　⑥発表　⑦他のグループの発表を聞いての感想やアドバイスの6段階に分け、自主的活動とグループ内での一往復半の言語活動を行った。

学びの成果と課題

【成果】課題を設定し、具体的な実践を想定しながら一往復半の言語活動を行うことで、実際の社会生活につながる深い学びができたと考える。また他のグループへ意見を述べることで、グループに設定された課題だけではなく、他のグループの課題についても主体的に学び、考えることができた。一連の言語活動を通して、「自分の気持ちを上手に伝える方法を見つけ、表現する」という目標を達成することができたと考える。

【課題】非言語的活動が少なかったことが挙げられる。表情や身振り手振りのみで表現することを教える授業も必要である。

技術科

現を基本とした共同作品の制作における指導の工夫

目標の明示 | 明確な指示 | 話し合いの基本 | 一往復半の言語活動 | フィードバック

ティーチングスキルを活用した言語活動の工夫

話し合いの基本　実技教科は、作業を個人で行うことが多く個人差（経験の差）により進度が異なるため、班単位で作品制作ができる学習内容に取り組んでいる。

情報基礎（Pepperを用いたプログラミング）

①基本操作の習得
　基本命令の内容を受動的で作業する。
②課題の設定（作品テーマの提示）
　班で相談してフローチャートを考える。
③プログラミングの分担
　（動作、話す、画像、タッチセンサ、音）
④発表
　作品の概要説明、プログラムの説明、実行
　質疑応答、改善点の確認　フィードバック

学びの成果と課題

【成果】プログラムの作成は難しいと思う生徒が多いが、班で作成したプログラムを発表し、他者からの質疑や改善案を聞くことでおおいの考えを交流することがプログラムの改良につながっている。発表を通して表現力が向上した。

【課題】使用する命令を共通にしたことで制限した作品となっている。今後は使用する動作命令の選択肢を増やして自由な発想で作品を制作させたい。

3　教科等横断的な学びにおける豊かなコミュニケーションスキルの活用

夢！自分発見！プログラム

見通しを持って活動する力・主体的に聴く力の育成　第1学年　総合的な学習の時間

社会人とコミュニケーションをとり、働くということに興味を持つきっかけになることを目的に、第1学年では、NPO法人キッズ・パーソン21の協力を得て企画・運営した「夢！自分発見！プログラム」を行っている。

（1）大人との対話を体験　見通しをもって活動する力の育成

前半の「コミュニケーションゲーム」は、生徒3～4人のグループに、ファシリテーターの大人が1人入り、様々な課題をクリアしていくものであり、大人とコミュニケーションを目標に図るための要素として「言葉遣い」「姿勢」「熱意」「論理性」「愛嬌」の5つの要素を体験的に学んでいくことを目的とし、対話力を高める活動として大変効果的であった。

（2）質問を考えた一往復半の言語活動　主体的に聴く力の育成

後半のスカイパーJSAT株式会社取締役専務兼社長、日本DMATインストラクターによる講演では、仕事に誇りをもつきっかけや、学生時代の様子など、生徒たちも興味をもって聴いていた。講演の最後には、質疑応答の時間を設けられ、生徒たちはたくさんの質問を行い、主体的に聴く力の育成につながった。

様々な大人と、課題に応じた言語活動（グループ対話、質疑応答、コミュニケーション）を行うことで、①人間関係・社会形成能力、②自己理解・管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力の向上が見られ、最後の振り返りシートから、それらの向上や意識の高まりが見られた。

キャリア講話

見通しをもって活動する力の育成・主体的に聴く力の育成　第2学年　総合的な学習の時間

本校では第2学年を対象に、職場体験に行く前の一学期に、キャリア講話を聴く会を行っている。生徒にとって身近な大人である保護者や当時の九十名をお招きし、様々な職種の話をしていただき、質疑応答することにより、働くことの意義、その職業を選ぶための道筋等を学ぶことを目的に実施している。

（1）講師に少人数でインタビュー　主体的に聴く力の育成

本年度は、ティーチャー・アーティスト、エンジニア、商社マン、不動産業、国家公務員、デザイナー、販売プロデューサー等、11種という多種にわたる講師の方に講話をしていただいた。生徒は希望の職種ごとに5～6人という少人数のグループに分かれ、1回あたり約30分の講話を2種類聞かせていただき、その後事後に感じておいた質問をし、仕事内容、やりがい等たくさんのことを教えていただいた。さまざまな業種で活躍されている講師の方々に直接お話を伺える貴重な機会に、生徒たちは大変刺激を受けていた。この活動は、主体的に聴く力を育成すると同時に、インタビューにより相手の話を引き出す力を育成するよい機会となっている。

職行の仕組みについて教えていただいている様子

（2）発表会の実施　見通しをもって活動する力の育成

事後学習として、グループごとにパワーポイントにまとめ、発表会を行い自分の担当外の講師の内容も共有を図ることで、プレゼンテーション能力の育成も図っている。その後、職場体験の発表会へと繋げ、主体的な指導の流れとして確立している。

修学旅行発表会

見通しをもって活動する力の育成・主体的に聴く力の育成　第3学年　総合的な学習の時間

第3学年では修学旅行事後学習として、翌学年に向けて、パワーポイントによる事後発表会を実施した。修学旅行での班行動をもとに、ルートの決め方や探索したスポットについて、まとめとまとめ、1・2年生にわかりやすく説明するプレゼンテーションを行った。今後、修学旅行を迎える後輩たちに、班行動のノウハウを伝えるとともに、分かりやすい説明になっているか等の、相互評価を実施することで、振り返りを行った。

（1）聴くことに集中した後に質疑応答　主体的に聴く力の育成

評価記入表を準備しておき、各班の発表終了後に評価と感想を記入させた。発表後には、生徒からの質疑応答の時間を取り、発表者がそれに答える一往復半の言語活動を行った。質問に対して、ただ答えるだけではなく、説明を添えて答えることを意識し、一問一答とならない受け答えを行うよう努力した。

（2）原稿を「読む」ではなく「話す」発表　評価規準の観点を明示

「発表者は、原稿を持たずメモで話すことを基本とし、長文は厳密に読まること」、「分かりやすいパワーポイントの資料を作っていること」などの評価規準を明確にし、発表の段階から、生徒たちは、良い発表とはどのようなものなのかを意識しながらプレゼンテーションの構成を立てて当日の発表を行った。

（3）必ず質問をする場面の設定　見通しをもって活動する力の育成

各班の発表後の質問については、挙手のない場合、司会者からの指名により、聴衆者からの質問を引き出した。

ダンスパフォーマンス

見通しをもって活動する力・話し合い指導の共有化　全学年　運動会

毎年6月に行われる運動会の大きな演技種目として、学年ごとにダンスを発表する「ダンスパフォーマンス」が実施される。各クラス男女4名ずつの計24名のダンスリーダーが中心となり、演出、振り付け、全体指導などダンスに関する全てのリーダーシップをとっている。

（1）ダンス完成のための話し合い　話し合い指導の共有化

振り付けを考える作業では、リーダー同士さまざまな意見を言し合い、振り付け案を学年全体へ提案する。練習の結果、修正箇所や新たな振り付けを加え、さらに良いものへと仕上げることで、学年全体のダンスを完成させる。

（2）計画を意識させる指導　見通しをもって活動する力の育成

リーダーは、ダンスパフォーマンス本番に向け、計画的に話し合い、見通しをもって活動する力を身に付ける。リーダーだけでなく、生徒同士が自主性をもって、教え合うことでコミュニケーションスキルを高めていく本校の特色ある教育活動となっている。

実践ダンスパフォーマンス実践過程

平成30.2月上旬	ダンスリーダー決定
2月下旬	選曲
3月	振り付け案提出→学年検討
4月上旬	振り付け完成
4月下旬	全体指導開始
5月中旬	ダンス練習期間
6月2日	ダンスパフォーマンス本番

一往復半の生徒総会

話し合い指導の共有化・主体的に聴く力の育成

全学年　時間活動

本校では1学期に、各専門委員会の方針や諸活動に関して公示する機会として生徒総会を行っている。生徒総会を受けて、各学級では学級討議を行い、各専門委員会の諸活動について質問が出た場合は年徒総会で各専門委員長と質疑応答をすることとなっている。その活動の中で、特に以下の2点のコミュニケーションスキルを指導している。

(1) グループでの話し合いを全体で共有　話し合い指導の共有化

各専門委員が提出した委員会の活動方針や内容について、議案書を元に各学級で討議を行う。その際に、コミュニケーションスキルの「話し合い指導の共有化を活用し、グループ内での話し合いや全体への発表をする際に、個人で思考した内容を共有し、共有された意見の共通点を元に思考を収束させ、意見の絞選や新しい視点や考え方を含んだ質問を作成する。

(2) 聴いた内容に反応する善井　主体的に聴く力の育成

各学級で出た質問について、生徒総会で各専門委員長が全校生徒の前で質疑応答を行う。その際、質問者と回答者共に用意した質問や回答に加え、相手側からの意見に対する追加の質疑応答を行う。「追加の質疑応答」を設定することで、質疑応答をしている生徒だけでなく会場にいる生徒全員が、内容について関心をもちながら聴こうとする姿勢を持ち、主体的に聴く力の育成を図ることができた。また、「高機ティーチングスキル」のひとつである「一往復半の言語活動を含めた模倣的な活動を設定することができた。

考え、議論する道徳

話し合い指導の共有化・評価規準の納点を明示

第2学年　道徳

第2学年では道徳教育指導力の向上を目指し、以下の5点にわたる授業改善を行った。

(1) 同指導案による複数学級での授業実践

学年教師がクラスを入れ替え同教材で二回指導を行い、思いている教員が授業参観することで、前回の授業での課題を改善し、質の高い授業を目指すことを目的に行った。

(2) 自ら考え、話し合いで深める授業　話し合い指導の共有化

考え、議論する道徳への移行を重視し、個人で考えを深める段階と、話し合うことで考えを深める段階とを意図的に設定した。また、モラル・ジレンマを題材にしたディベートも実施し、多角的なものの見方、考え方ができるように指導方法を工夫した。

(3) 自己評価・相互評価　評価規準の納点を明示

①ねらいについて自分で考えを深めることができたか　②ほかの人の意見を聞くことで、考えを深めることができたか　③学んだことを、今後の生活に活かしていきたいか、の三点について、毎回の授業後に生徒に自己評価を行わせた。

(4) 教師の評価

平成31年度より行われる評価に向け、生徒の変容を見とれるように、毎回のワークシートをファイリングし、ポートフォリオを作成した。

(5) 道徳通信の発信

「道徳で深し合った内容や生徒の意見を学年だよりに「道徳通信」として掲載することで、家庭への情報提供とし、これをきっかけに家庭でも話題にし、話し合うことにより、生徒の学びを深めることを目的とした。

Ⅶ　研究のまとめ

1　授業アンケート結果から

各学期末に全生徒を対象とした授業アンケートを実施して授業改善に役立てている。質問1～4は、全教科共通の高機ティーチングスキルに関する内容、質問5～6は教科に関する内容で実施した。

質問1　教材の内容に興味がもてた。
質問2　始業時に1時間の学習の目標がわかった。
質問3　学んだことを活用して自分の考えを表せた。
質問4　考えを交流する一往復半の学習活動ができた。

凡例	
系列1	とてもそう思う。
系列2	どちらかといえばそう思う。
系列3	どちらかといえばそう思わない。
系列4	思わない。

以下は教科の質問5・6とアンケート結果のグラフである。

グラフ左：H29・7月　生徒200名　グラフ右：H30・11月　生徒196名

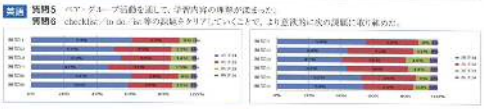
国語　質問5　国語の授業に大切だと考える。
質問6　国語で学んだ知識や技能を使うところがあったと思っている。

社会　質問5　写真や映像を見ることは、授業における理解を深める役に立っている。
質問6　意見を聞くから、新たな発見をすることができた。

数学　質問5　習得した知識を利用する問題に積極的に取り組んだ。
質問6　わからない箇所を生徒同士で相談したり、教えあうことができた。

理科　質問5　実験や観察に対して意欲的に取り組めた。
質問8　授業を通して科学的な視点に興味をもった。

英語　質問5　ペア・グループ活動を通して、学習内容の理解が深まった。
質問6　checkin//in do//do 等の課題をクリアしていくことで、より意欲的に次の課題に取り組めた。



音楽　質問5　歌唱や器楽の技能の向上に意欲的に取り組めた。
質問6　音や音楽を聞きわけ、その良さや魅力に気付いて表現することができた。

美術　質問5　意欲的に作品に取り組めた。
質問6　授業に必要な道具を忘れたり、忘れ物をしない。

保健体育　質問5　学習に意欲的に取り組むことができた。
質問6　自分の学習の成果がわかった。

技術・家庭　質問5　実習に対して意欲的に取り組めた。
質問6　授業を通して学んだことを、生活に生かすことが大切だと思う。

総合的な学習　質問5　わからないことや新しいことを調べたり質問したりして解決できた。
質問6　学習の成果や反省点について、自分で思考してまとめることができた。

2　成果と課題

この授業アンケートは教科ごとに全学年を集計した結果で、学習内容が学期で異なるため、その影響はあるが質問2～3の数値の変化を見ると、ほとんどの教科で改善されている。アンケートだけで是とするものではないが教師間の意識と授業の質は改善している。また授業力調査では学年が上がるごとに5教科の校内平均正答率が全国平均正答率を大きく上回るように、高機ティーチングスキルの効果が顕著である。図は4月に行われた全国学力・学習状況調査の質問32（・2年生のときに受けた授業では課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでいたと思いますか）の結果。当てはまると回答した生徒が全国平均25.3%に対し本校では45.3%と高い数値となっている。これらのことから新学習指導要領を踏まえた言語活動の充実・深い学びのための授業改善へが図られていると推測できる。課題としては、今後も全校体制で継続した授業改善を行い、また評価方法の見直し・設問の改善・新学習指導要領で新しく示される評価の観点との整合性を吟味していく必要がある。「世界に生きる子ども」を育成すべく、獲得した知識や技能を生徒自らが活用していけるよう、授業改善を更に進めていく所存である。

おわりに

港区立芝浦中学校　校長　中　島　邦　彦

新学習指導要領移行期間である今、本校では学習困難な社会を生き抜く生徒にとって必要な資質・能力をどう育成していくかを教育の課題と捉え、本研究が始まりました。今回の改訂のポイントである「生きて働く「知識・技能」の習得」「未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成」「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善」の三点に焦点を当て、その達成のために組織としての教育力向上を図り、様々な取組を試行しました。目標は教員全員が一定のレベル以上のスキルを有する集団となることです。

そこで、本校の教員であれば全員が共通して身に付ける指導技術である「高機ティーチングスキル」、教科等横断的な学びで特別活動や総合的学習の有用性を高める「高機コミュニケーションスキル」を策定しました。当初、戸惑いを感じる教員もいましたが、「授業を見合う期間」を設け指導技術を共有したり、教員相手に「高機ティーチングスキル」を活用した模擬授業を実践したりするなかで共通理解が図れ、教員の「生徒のための良い授業を試験しよう」という思いが高まりました。その上で全ての教育活動を通して全教員がこのスキルを活用し、継続的に生徒にアプローチした結果、徐々に言語活動の充実が図られ、個→集団→個の話し合い活動や一往復半の言葉のやり取りが当たり前になってきました。生徒集団の特性への対応等まだまだ不十分な点がありますが、言語活動に関する生徒の意識が変容し、気持ちを伝えあう活動が日常的に行われていることは成果です。またこの研究をきっかけに教員の意識が変わり、授業改善に向けた自己研鑽がなされたことは学校としての大きな財産です。今後もさらに研究を継続し、生徒の資質・能力の育成に取り組んでまいります。

最後になりますが、この研究の場を与えていただいました港区教育委員会 青木 康子 教育長、港区教育委員会事務局学校教育部教育指導課の先生方、ご指導をいただいた多くの講師の先生方に感謝いたします。今後とも一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ご指導いただいた先生

明治学院大学　心理学部教育発達学科　教授	中村敦雄	先生
玉川大学　教育研究リサーチセンター客員教授	吉田和夫	先生
実践女子大学特任教授	山田佳子	先生
東京都教育センター　指導力向上調査研修主事	吉野早織	指導主事

研究に関わった教職員

○研究主任　○研究推進

校長　平川宏美　副校長　中島邦彦

平成29年度

一学年	二学年	三学年
○川端一穂　高澤淑子　○堀越精介　条重修英	○園　潤子　○谷田　博　小山広定　和田為仁　村上明彦	○戸角　豊　○肥嶋純一　○宮原友子　菅谷尊雄　渡邊利恵子

平成30年度

一学年	二学年	三学年
青谷　計　○野嶋義一　○中西　豊　和田為仁　長澤利恵子	○石川　稔　○相澤一範　渡部康子　山崎廣第　堀越精介	○園　潤子　○谷田　浩　○小山広定　菅原裕典　村上明彦